公立高校合格者選抜方法

● DATABOOK OF HIGH SCHOOLS

まだ先のことと考えていた高校入試も、中学３年生としての自覚が高まるとともに、次第に現実のものとして感じられるようになってきたことと思います。万全の対策をした上で入試に臨むためにも、まず入試のしくみを知り、何が大事なのか、いつどのように勉強すればよいのかを知っておくことは非常に大切なことといえます。

ここでは大きく変わった北海道の入試のしくみと入試状況について説明します。入試の厳しさを、そして、志望校に合格するためにはどれだけ勉強しなければならないかを十分に知った上で、今後の受験勉強に役立てて下さい。

1 ONE 推薦入試

推薦入試　普通科の約５割が実施

現在、普通科の約５割の高校が推薦入試を採用しています。そして、採用枠は募集定員の20%もしくは 30%になっています。普通科以外では、農業系、水産系の学科では募集定員の範囲内、その他の専門学科と総合学科は募集定員の50%程度です。

推薦入試ではすべての学校で面接が実施されます。そのほか「作文」・「自己アピール文の提出」・「英語による問答」・「英語の聞き取りテスト」・「実技」の５項目があり、各高校がこのうちのいくつかを選択して実施しています。また、札幌市立の一部の学校では、「適性検査」という筆記試験も行います。なかでも最も多い項目は、入学志望の動機や入学後取り組みたいこと、中学校の部活動のことなどについて、自分がアピールしたいことを書いて提出する「自己アピール文の提出」です。これらのうちどれを重視するかは各高校に委ねられています。

2023 年度入学の推薦入試では、札幌旭丘（普通）や札幌清田（普通）で「英語の聞き取りテスト」を実施し、札幌国際情報（国際文化）や千歳（国際教養）など英語教育を重視している学校では「英語による問答」を実施しました。また、札幌清田（グローバル）は「英語の聞き取りテスト」「英語による問答」の両方を実施しました。

2 TWO 一般入試

北海道の一般入試（全日制の課程に関わる選抜）では、2009（平成 21）年度入学者選抜から「学校裁量問題」を実施してきましたが、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、2022（令和 4）年度の一般入学者選抜の学力検査からは全ての生徒に同じ問題を課し、全ての教科で、基礎的・基本的な知識及び技能とともに、思考力・判断力・表現力等についてもバランスよく出題するように改善されました。

事項		2022（令和４）年度入試から	2021（令和３）年度入試まで
学力検査問題		全ての生徒が同一の問題を解答	学校裁量選択校に出願した生徒のみ 学校裁量問題を解答
	得　　点	各教科 100 点、計 500 点満点	各教科 60 点、計 300 点満点
	解答時間	各教科 50 分	各教科 45 分
	英語の聞き取りテスト	配点は、全体の 30 ～ 35%程度 英文が２回読まれる問題と１回読まれる問題を出題	配点は、全体の 25% 英文が読まれる回数は２回
	解答用紙	A3 版	B4 版
実技など		各高校の裁量で、面接、実技を実施	各高校の裁量で、面接、実技、作文を実施

入学者の選抜は、これまで通り、次に示す方法で合格者を決定します。

Ⅰ　70%同等
（ア）募集人員の 70%程度
個人調査書の「各教科の評定」の記録と学力検査の成績を同等に取り扱う。
Ⅱ　学校裁量
（イ）募集人員の 15%程度
個人調査書の内容等を重視する。
（ウ）募集人員の 15%程度
学力検査の成績を重視する。

選抜の手順は、次のようになっています。
①（ア）による選抜を最初に行う。
②（ア）において合格とならなかった者を対象に、（イ）、（ウ）の方法により選抜を行う。（イ）、（ウ）のどちらから先に選抜するかの判断は、高等学校長の判断で決める。
※（イ）の選抜の、個人調査書の「各教科の評定」の記録と学力検査の成績の重視の比率や個人調査書の「各教科の評定」以外の記録で重視する項目や実技など重視する内容は各学校で決める。
※（ウ）の選抜の、個人調査書の「各教科の評定」の記録と学力検査の成績の重視の比率は各学校で決める。

Ⅰ.70%同等

①　内申点（積算内申点）

中学３年間の各３学期の成績を５段階評定で９教科合計（45 点満点）して、1・2年時の点数をそれぞれ２倍、３年時の点数を３倍して合計を表します。

例えば、３年間オール５の場合、45 ×２＋45 ×２＋45 ×３＝315 点となります。中１で 38・中２で 40・中３で 42 の場合、38 ×２＋40 ×２＋42 ×３＝ 282 点となります。３年間オール４なら 252 点、オール３なら 189 点となります。

この値を高校側は、20 点刻みで上から順にＡ、Ｂ、Ｃ…Ｍと 13 段階にランク付けしていきます。（表１参照）

中３時の比率が高くなるため、中３時に頑張れば良いと思う人がいるかもしれませんが、中１時から内申点が良いにこしたことはありません。３学期は１年間の総合評価として点数が決まるため、１学期から目標を持ち頑張って下さい。

内申点の計算方法
（中１・３学期の内申点の合計）×２
＋（中２・３学期の内申点の合計）×２
＋（中３・３学期の内申点の合計）×３

表１

内申ランク	積算内申点
A	315 ～ 296
B	295 ～ 276
C	275 ～ 256
D	255 ～ 236
E	235 ～ 216
F	215 ～ 196
G	195 ～ 176
H	175 ～ 156
I	155 ～ 136
J	135 ～ 116
K	115 ～ 96
L	95 ～ 76
M	75 以下

② 入試当日点（学力検査の結果）

入学試験の教科は、国語、数学、社会、理科、英語の５教科で、１教科 100 点満点の合計 500 点満点で実施されます。試験時間は、１教科 50 分です。そして入試当日点は、１教科 100 点満点の５教科合計 500 点満点を、20 点刻みで上から順に①②③…と 25 段階にランク付けし、合否の判定の材料とします。（表２参照）

例えば、積算内申点 257 点、入試当日点 381 点の場合、内申ランク C、入試点ランク⑥になります。一方、積算内申点 223 点、入試当日点 340 点の場合、内申ランク E、入試点ランクが⑨になります。内申ランクが高ければ高いほど入試に有利になりますが、当日点数がまったく取れなくてもよいというわけではありません。「内申点」「入試当日点」両方とも基準をクリアーしなければ合格をつかみとることはできません。

表２

入試点ランク	
①	500 ～ 481
②	480 ～ 461
③	460 ～ 441
④	440 ～ 421
⑤	420 ～ 401
⑥	400 ～ 381
⑦	380 ～ 361
⑧	360 ～ 341
⑨	340 ～ 321
⑩	320 ～ 301
⑪	300 ～ 281
⑫	280 ～ 261
⑬	260 ～ 241
⑭	240 ～ 221
⑮	220 ～ 201

（以下20点刻み）

傾斜配点のしくみについて

一般入試で特定の教科の配点を最大２倍にできる傾斜配点は、職業学科と理数科や英語科などの専門学科だけでなく、一部の普通科でも実施されます。平均的に学力が高い生徒だけでなく、苦手教科があっても傾斜のかかる教科が得意な生徒であれば合格するチャンスが十分にあるといえます。

（傾斜配点の例） 数学と理科に1.5 倍の比重をかける場合

	国	数	社	理	英	合計		国	数	社	理	英	合計
Eさん	55	74	57	90	77	353 点	→	55	111	57	135	77	435 点
Fさん	83	58	70	74	82	367 点	→	83	87	70	111	82	433 点

入試の５教科の合計得点では、F さんは E さんより 14 点高いです。しかし、数学と理科に 1.5 倍の比重をかける傾斜配点での選抜方法では、E さんが F さんより 2 点合計点が高くなります。

2022（令和４）年度入試で傾斜配点を採用したのは、石狩学区では、札幌北（普通）、札幌啓成（理数）、札幌国際情報（国際文化）、千歳（国際教養）、札幌旭丘（数理データサイエンス）、札幌清田（グローバル）、上川学区では旭川西（理数）のみです。

裁量問題の廃止

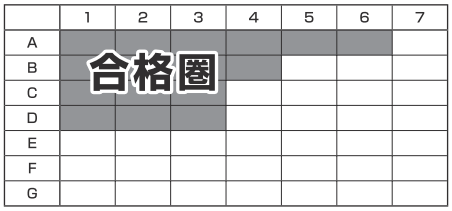
2021（令和３）年度入試までは、基礎力を重視した全道統一の問題ではトップ高の受験生の間では差がつかないことなどを理由に、各高校の判断で英、数、国の３教科で大問１問分を難易度の高い応用問題に差し替えて実施する学校裁量問題を導入していました。2022（令和４）年度入試からは、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、一般入学者選抜の学力検査において、全ての生徒に同一の問題を課し、全ての教科で、基礎的・基本的な知識及び技能とともに、思考力・判断力・表現力等についてもバランスよく出題するよう変更されました。数学は論理的思考力、英語･国語は記述力、表現力を試す問題となっています。より一層の得点力が必要となり、今後も学力検査を重視する傾向になっていくことが考えられます。

③　合格者選抜方法

各高校は①、②で説明した内申点と入試当日点をもとに相関表を作成し、募集定員の70%については、内申点と入試当日点を同等に評価して上位から合格とします。

札幌西高校を志望する、Ａ君、Ｂ君を例に合格者選抜について説明をします。

（例　札幌西高校）



	１年３学期 内申	２年３学期 内申	３年３学期 内申	積算内申点
Ａ君	42 × 2	42 × 2	43 × 3	297
Ｂ君	34 × 2	36 × 2	36 × 3	248

Ａ君の積算内申点は 297 点なので、内申ランクでＡに該当します。一方、Ｂ君の積算内申点は 248 点なので、内申ランクでＤに該当します。Ａ君、Ｂ君ともに札幌西高校を受験した場合、Ａ君は相関表の内申ランクがＡになりますので、入試点ランク１～６で合格できます。よって、入試当日 381 点以上であれば、合格となります。しかし、Ｂ君は相関表の内申ランクがＤになりますので、入試点ランクで１～３で合格となります。そのため、Ｂ君は入試当日 441 点以上が必要になり、Ａ君より 60 点以上多く得点しなければ合格できません。つまり、積算内申点をどれだけ持っているかが、合否を決める上で非常に重要になります。

このように、積算内申点が高ければ高いほど有利ですが、仮にＡランクの内申点があったとしても入試当日 380 点以下では合格できません。また、入試は学校の定期テストと違い、問題のレベルが高く、範囲も広いので、油断していると悲しい結果になることもありえます。内申点が十分あるからといって油断はできません。

入試の合格のためには、「内申点」と「入試当日点」の両方が必要！
内申点だけでなく、入試当日に目標点がクリアーできる実力を養成すること。

Ⅱ．学校裁量枠

公立高校の一般入試において、各高校が独自の比重をかけ合格判定を行える「学校裁量枠」が 30%あります。つまり、各高校定員の 70%は入試点と内申点を同等に評価して合格者を決定し、残り 30%の枠のうち 15%ずつを入試点重視枠と内申点重視枠でそれぞれ用いる比率で入試点と内申点を評価し、合格者を決めます。そして、重視の度合いは各高校で決めることができます。

例えば、入試点重視枠で「入試点９：内申点１」であれば、合否の判定にほとんど内申点は関係しない入試本番一発勝負となります。

一方、内申点重視枠で、「入試点０：内申点 10」であれば、たとえ入試点がゼロでも影響ありません。しかし、全体的に見ると、学力検査を重視し、内申点の比率を下げる高校が比較的多い傾向にあります。今後も学力検査を重視する傾向になっていくことが考えられます。

（入試点を重視した選抜の例）　入試点：内申点　８：２の場合

	入試点		内申点			入試点×0.8		内申点×0.2	
C君	400点	＋	250点	＝ 650点 →		320点	＋	50点	＝ 370点
D君	425点	＋	200点	＝ 625点 →		340点	＋	40点	＝ 400点

定員の 70%を占める、入試点と内申点を同等に見る選抜方法では、C 君が D 君より得点が 25 点高くなっていますが、入試点を重視した選抜方法では、入試での得点が高かった D 君がC君より 30点高いことになります。そのため、多少内申点が足りなかったとしても、学力のある生徒は入試点重視枠での合格も十分考えられます。

実力のある生徒には、入試点を重視した選抜での合格可能性が十分あります。志望校が入試当日点を重視した選抜を取り入れているのなら、積算内申点が足りないからといって志望校をあきらめないことが大切です。実力をしっかり養成すれば十分逆転もありえます。

3 THREE 追検査

一般入学者選抜の学力検査においては、これまでインフルエンザ罹患者やその疑いのある受検者等に対して、特別検査室での受検などにより受検機会の確保をしていましたが、入学者選抜は生徒にとって自己実現を図る上で大きな意味を持つものであり、体調を崩したまま受検に臨むことがないようにとの配慮から、2021（令和 3）年度入試から追検査の機会が設けられるようになりました。